

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

カナダにおける都市在住イヌイトの社会・経済状況：モントリオール地区の調査報告を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): urban natives of Canada Inuit reasons for migrations ways of life ethnic identity economic situations social networks 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004101

カナダにおける都市在住イヌイットの社会・経済状況

——モントリオール地区の調査報告を中心に——

岸 上 伸 啓*

Current Socio-Economic Situations of Urban Inuit in Canada: A Case Study from Montreal

Nobuhiro Kishigami

カナダにおいては1980年代に入ってから、多数のイヌイットが都市に移動し、居住するようになった。1991年に実施された先住民人口調査によると、カナダ全体でイヌイットであるというアイデンティティを持つ4万9千人の中で、10万人以上の都市に住んでいる人口は8,300人あまりである。これらの都市在住のイヌイットの生活の実態はあまりよく知られていない。本稿では、カナダ国ケベック州モントリオール地区に在住するイヌイットの出身地、生活の実態、彼らの将来展望について報告する。そして彼らの文化やエスニック・アイデンティティがどのように変容しつつあるのかについて論ずる。1997年の時点では、モントリオール地区に在住するイヌイットは独自のコミュニティーや都市文化を形成していない。片親が非イヌイットであったり、モントリオール地区で生まれ育ったイヌイット出自の人はイヌイット語を話せなかったり、イヌイット的な生活様式を保持していなかったりするが、イヌイット意識は持続している。この中には長期にわたる都市生活や異民族婚の結果、2つ以上のエスニック・アイデンティティを併せ持つ人が出現しつつある。

In 1991, 8,300 of the 49,000 Inuit in Canada were residing in several southern Canadian cities with populations over 100,000. The overall living situation and conditions of urban Inuit in Canada are relatively unknown. In this paper, I will describe the reasons why Inuit migrated from their home communities to the urban environment of Montreal

* 国立民族学博物館先端民族学研究部

Key Words : urban natives of Canada, Inuit, reasons for migrations, ways of life, ethnic identity, economic situations, social networks

キーワード : 都市先住民, イヌイット, 移住の理由, 生活様式, エスニック・アイデンティティ, 経済状況, 社会的ネットワーク

and their socio-economic situation as of 1997. I then will discuss changes in the life styles and ethnic identities of these “urban Inuit”. Inuit living in Montreal have not yet established a distinct community or urban culture. Rather, Montreal Inuit exhibit emerging multiple identities that may relate to such factors as prolonged city residence and marriage to non-Inuit. This urban sub-population generally does not speak Inuktitut nor practice “northern Inuit” ways of life, yet maintains “Inuit” as one of its several ethnic identities.

はじめに	Ⅲ-4. 社会的ネットワーク ——都市と故郷——
I. 調査の目的と方法	Ⅲ-5. イヌイット語とエスニック・アイ デンティティ
I-1. 調査の目的と方法	Ⅲ-6. 都市における社会問題
I-2. 調査対象者について	Ⅲ-7. 環境認識——都市と極北の村——
II. モントリオール地区に在住するイヌ イット	Ⅲ-8. 将来
II-1. 極北地域とモントリオール地区の 社会・経済的な諸条件	IV. 検討
II-2. 出身地	IV-1. 移動
II-3. モントリオール地区に来た理由と 定着の方法	IV-2. 経済階層と社会的ネットワーク
II-4. 在住期間	IV-3. 文化とエスニック・アイデンティ ティ
III. モントリオール地区在住イヌイットの 生活の実態	IV-4. 都市在住イヌイットの将来
III-1. 生活と経済状況	IV-5. 都市在住イヌイットの法的認定の 困難さ
III-2. 住居と在住地区	V. 結びにかえて
III-3. 食生活と健康状態	

はじめに

カナダの先住民はファースト・ネーションズ（公認インディアン、非公認インディアン）、メーティス（インディアンとおもにフランス系カナダ人との間に生まれた人々とその子孫）、イヌイットに分けられる（Frideres 1998: 27）。イヌイット以外のカナダ先住民の場合、第二次世界大戦後に都市への人口移動が顕在化し、1986年には全人口の3分の1以上が都市で生活を営んでいた。1990年代に入っても都市における先住民人口は増加中であることが知られている（Frideres 1998: 237）。現在では、ファー

スト・ネーションズとメーティスの総人口の半分から3分の2が都市に住んでいるのではないかとされている (Peters 1996; Royal Commission on Aboriginal Peoples 1993)¹⁾。

イヌイットの都市への移動が知られるようになったのは1980年代である。そしてカナダの国勢調査と同時に1991年に実施された先住民調査 (Aboriginal Peoples Survey) によって、多数のイヌイットがカナダの都市に住んでいることが判明した。すなわち、自らをイヌイットである、ないしは部分的であるにせよイヌイットの出自を持ちイヌイット意識を持つ49,000人あまりの中で、人口10万人以上の都市に在住している人口は8,305人を数える (the Centre for International Statistics at the Canadian Council on Social Development 1996: table 1)。イヌイットのほぼ5人に1人が都市に在住していることになる。イヌイットが住んでいる都市を人口の多い順に10都市あげると、トロント (1,895人)、エドモントン (840人)、モントリオール (775人)、オタワ=ハル (725人)、カルガリー (630人)、バンクーバー (570人)、ウイニペグ (515人)、ハリファクス (360人)、セント・ジョーンズ (345人)、ビクトリア (260人) となる。

極北の村の都市化については研究が存在するものの (Honigmann and Honigmann 1970)、カナダ・イヌイットの都市への移動や都市生活についての研究は、イヌイットの都市への移動の歴史が浅いこともあって、ほとんど行われていない²⁾。

筆者は「都市における先住民社会の研究」プロジェクト (国立民族学博物館教授松山利夫代表) の一員として、カナダの都市先住民を担当し、1996年と1997年の夏にカナダ国モントリオール地区において、都市に在住するイヌイットの調査を実施した。その結果は、「イヌイットの都市居住は一時的である。」という筆者の予想に反して、都市在住イヌイットの半数あまりが5年以上も都市に住んでいることが分かり、先住民社会の変化の多面的な現実を認識せざるを得なくなった。本稿では、イヌイットがモントリオール地区に来住した理由や生活の実態を報告することを目的としている。

カナダにおける都市在住のイヌイットの移動や生活に関する基礎的な情報がほとんど存在しない現時点において、フィールド・データに基づく第一次情報を提示することは、速報的な内容であるとしても、都市在住のイヌイット研究を本格的に開始する上で重要なことである。また、今後、この研究をさらに進めていくためには、今回の調査で見出した問題点を整理することも重要である。この2つが本稿を執筆した理由である。

I. 調査の目的と方法

I-1. 調査の目的と方法

都市先住民を研究するテーマは多数あるが、もっとも基本的な問いは「それぞれの都市に居住する先住民がいかなる状況にあり、どういう社会を形成し、そこにはどのような歴史があり、人々はいかに生きているかをあきらかにする」(松山 1997: 97) ことである。筆者はこの4つの基本的な問いを念頭に置いて、調査地をモントリオール地区に設定し、同地に住むイヌイットの来住の理由、社会・経済的な状況の実態について全体的な把握を試みることにした³⁾。

モントリオール地区を調査地に選んだ理由は3つある。第一は、イヌイットの政治団体との交渉の結果、モントリオール地区でのイヌイットの実態調査がイヌイット側からも必要とされていることが分かったからである。第二に、モントリオール地区は東部極北地域に住むイヌイットにとっては、定期航空便で連結されており、南への出入り口としての役割を果たしているからである。第三に、筆者は1980年代の半ばからケベック州極北部ヌナヴィク (Nunavik) のイヌイット社会で調査を行っており、そこに住んでいるイヌイットが移動しやすいモントリオール地区においては、極北の村の状況を視野に入れながら都市在住のイヌイットを調査できると考えたからである。

モントリオール地区の調査では、質問票を用いた面接によるインタビューを、マキヴィク、モントリオール先住民友好センター、シェ・ドリ、カティヴィク教育委員会という都市イヌイットに関係する諸団体において実施した。質問の内容は、モントリオール地区に来た理由、移動歴、仕事と収入、社会的ネットワーク、故郷との関係、食事、健康、住宅事情、イヌイット語の能力、モントリオール地区と極北の出身村との違い、モントリオール地区の長所と短所、将来、都市において必要とされるサービスなどに関してであった。1997年の調査では55人のイヌイットにインタビュー調査を行った⁴⁾。今回のインタビュー調査が、統計学的な意味での無作為による標本抽出ではなかったことを認めた上で、ここではインタビュー調査の結果に基づいて調査報告を行いたい⁵⁾。

I-2. 調査対象者について

1997年の6月を基準とすると、筆者がインタビューしたイヌイットの年齢とその人数は表1に示す通りである。

平均年齢は、33.2歳であった。20歳代の後半から40歳代の前半の間に人口分布が集中していることが分かる。また、55歳を越える人はきわめて少ない。さらに性別について言えば、55人のうち、男性は19人（34.5%）、女性は36人（65.5%）であり、女性の総数は男性の約2倍である。

今回インタビューを実施したイヌイットを、職の上で分類すると、有職と無職、学生に分けることができる。

有職者（パートタイムを含む）の総数は、22人であった。このうち7人はマキヴィクで、11人はカティヴィク教育委員会で、2人はモンリオール地区の先住民友好センターで事務員などとして、2人はパートタイムの通訳として病院で働いていた。

無職の人にはおもに福祉金に頼りながら生活をしている人と、無収入で住所不定の人がいる。今回調査した無職者の総数は25人であり、そのうち22人が福祉金を受けていた。3人は福祉金を受給しておらず、住所不定の状態にあった。

学生とはモンリオールの市内や近郊にある大学（マクギル大学やコ

表1 調査対象イヌイットの年齢別人数

	人数
17歳	1人
19歳	2人
21歳	2人
22歳	1人
24歳	2人
25歳	1人
26歳	1人
28歳	3人
29歳	1人
30歳	5人
31歳	3人
32歳	4人
33歳	3人
34歳	1人
35歳	3人
36歳	3人
37歳	4人
38歳	4人
39歳	1人
40歳	3人
42歳	2人
43歳	1人
44歳	1人
46歳	2人
58歳	1人

ンコーディア大学), ドーソン・カレッジなどセジェップ (CEGEP, 大学の教養部に相当する3年制の高等教育機関), 高校に在籍し, 学んでいる人たちである。インタビューを行った学生は8人であった。そのうち4人が大学生で, 4人がセジェップの学生であった。

II. モントリオール地区に在住するイヌイット

II-1. 極北地域とモントリオール地区の社会・経済的な諸条件

カナダ・イヌイットが, カナダ政府によってつくられた極北地域の各地の村落において, 定住生活を開始したのは1960年代であった。1970年代には先住民による権利獲得運動が盛んになり, 1975年にはケベック州極北部のイヌイットが「ジェームズ湾および北ケベック協定」(James Bay and Northern Quebec Agreement)を, 1984年には旧北西準州北西部のイヌヴィアルイトが「イヌヴィアルイト協定」(Inuvialuit Agreement)を, 1993年には旧北西準州中部および東部のイヌイットが「ヌナウト協定」(Nunavut Agreement)を, 州や国家を相手に締結した。これらの諸協定は極北地域に住むイヌイットの土地権, 生業権などに関する取り決めであった。

1990年代半ばまでにイヌイットは政治的な自律性を高めたが, 経済的にはカナダ政府やケベック州政府への依存度を高めていった。極北地域にはイヌイットが働くことができる定職が少ない。1983年には EC 共同体がアザランの毛皮の輸入を禁止したことによって, 毛皮市場が崩壊したために, 多数のイヌイットがそれまで以上に国や州が提供する福祉金や生活補助金への依存度を高めざるをえなかったのである。

1960年代以降, 極北地域におけるイヌイットの人口は増加の一途をたどった。そして定住村落は大規模化し, 現在では人口数4,000人を越えるイカルイト (Iqaluit) のような町まで出現している。

ケベック州の極北部にあるイヌイットの村イヌクジュアク (Inukjuak) を例として, カナダ極北地域のイヌイット社会の社会・経済状況を紹介しておきたい。イヌクジュアク村は, 1996年1月の時点で, 人口1,178名, 世帯数244であった。当時, 同村には, フルタイムの定職が152, パートタイムの職が80, そして夏期には建築・土木工事の仕事が97あった。フルタイムの定職の数は, 村の世帯総数よりも少ない上に, 学校の教員, 看護婦など高収入のある職にはヨーロッパ系カナダ人がついていた。1991年の統計によると, ヌナヴィクのイヌイット労働者の平均年収は1万5千ドル弱

(以下すべてカナダ・ドル)であった(Makivik 1997: 10)。1996年の同村の完全失業率(失業保険をもらっている人が稼働労働人口の中に占める割合)は34%で、不完全雇用率(絶対的に職のない率)は51%であった。極北地域は食料品や物品の搬送に経費がかかり、それは物価に反映されていた。例えば、ベーコン500グラムはモンリオール地区では4ドル程度の価格が、イヌクジュアク村では6ドル50セント近くするなど、物価は約1.5倍であった。このように極北の村では仕事が不足している上に、物価が高く、生活が厳しいと言える(岸上 1996b: 731-732)。

極北の村々では個人所有の家屋はきわめて少なく、住宅のほとんどが州政府や準州政府によって提供され、賃貸されている。1997年の統計によると、イヌクジュアク村には244世帯が存在する。その内訳は、1寝室型のアパート12世帯、2寝室型のアパート56世帯、3寝室型の家屋・アパート100世帯、4寝室型の家屋52世帯、5寝室型の家屋24世帯である。人口が約1,200名であるとする、一世帯あたりの員数は4.9名、一部屋あたりの員数は1.6名である。住宅状況は母子家庭や未婚の成人には厳しい状況にある。

カナダ政府、州政府、地方政府のいずれも、イヌイットに対し、極北の村々から都市への移動促進政策を実施することはなかったが、このような経済・住宅条件は、若いイヌイットを村から押し出す要因のひとつである。

モンリオール市を中核としたモンリール地区の総人口は309万人あまりである。モンリオール地区が、他のカナダの都市と大きく異なる点は、仏系住民が多数派(182万人、総人口の約60%)を占めており、フランス語が第一言語とされていることである。そこで職を得るためには、フランス語の使用能力が必要条件のひとつとなる。ケベック州の極北部からきたイヌイットの一部を除けば、ほとんどのイヌイットの第一言語はイヌイット語か英語である。モンリオール地区はイヌイットにとって就職に不利な場所であると言える。

しかしモンリオール地区にはイヌイットを雇用する団体や彼らの生活を補助してくれる慈善事業団体が複数存在していることも事実である。モンリオール市の郊外のラシーヌ市にはマキヴィクのモンリオール事務所があり、モンリオール市内にはケベック州極北部ヌナヴィク地域の教育を統括する機関であるカティヴィク教育委員会の本部事務所があり、イヌイットの正職員を抱えている。また、極北の村からイヌイットの病人を迎え入れる病院や宿泊施設は、イヌイット語の通訳として常時、何人かのイヌイットを雇っている。また、モンリオール地区には、複数の高校やセジェップ、大学があり、イヌイットの学生を受け入れている。モンリオール地区に

は、総合病院や小児科専門病院があり、バフィン島やケベック州極北部からイヌイットの患者を治療のために受け入れている。

モントリオール地区には先住民全体にサービスを提供する非営利団体である先住民友好センターがあり、都市に住むイヌイットもこの機関を利用している。シェ・ドリは女性のためのシェルターであり、イヌイットの女性も利用している。これら以外にも、衣類や食料を提供する慈善事業団体が複数存在し、弱者救済のサービスを提供している。モントリオール地区では、筆者が調べた限りでも、ウエルカム・ホール・ミッション (Welcome Hall Mission)、オールド・ブルーウェリー・ミッション (Old Brewery Mission Inc.)、メゾン・デュ・ペール (Maison du Père)、世界救世軍 (Salvation Army) が運営する女性用緊急シェルター、女性用宿泊施設、男性用宿泊施設とホテルで食事を無料でとったり、シャワーをあびたり、泊まることができる。

カナダ政府や州政府、その他の地方自治体は、都市に住むイヌイットを対象とした特別な社会・経済政策は実施していない。しかし、このようにモントリオール地区には、他のカナダの都市と同様に仕事場、学校、病院、救済センター、慈善事業施設が存在している。モントリオール地区には775人のイヌイットがいることが1991年の先住民人口調査で分かっている。同年の調査によると、この775人のうちイヌイットのアイデンティティだけを持つ者が320人、イヌイットとそれ以外のアイデンティティを併せ持つ者が455人であった。

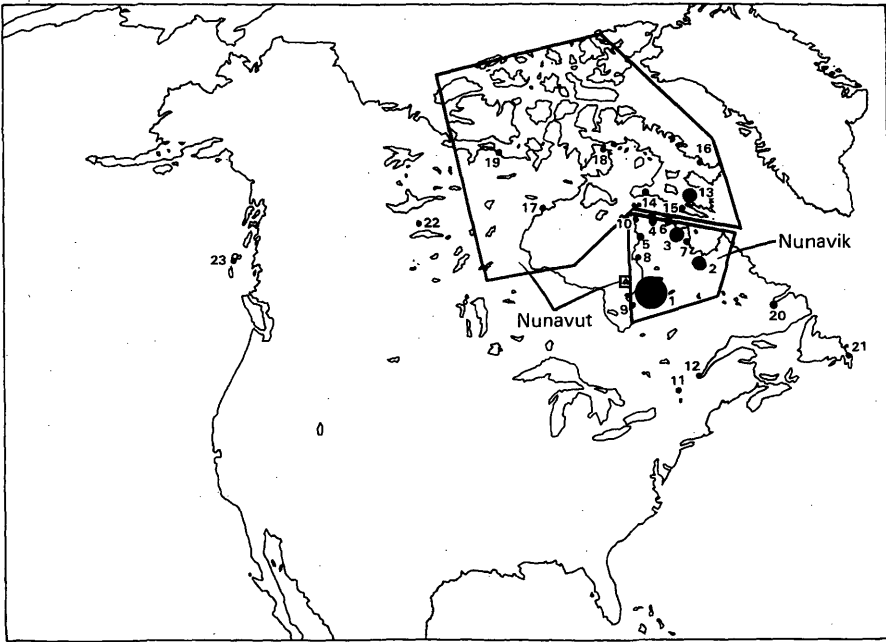
II-2. 出身地

インタビューを行った55人のイヌイットの出生地ないしは生まれてすぐに養子に出された場所を村名と地域で分類すれば次の表2のようになる (地図1参照)。

この表2を見ると、ケベック州極北部 (ヌナヴィク) 全域からイヌイットがモントリオール地区に来ていることが分かる⁶⁾。人口規模が900人を越す村 (クージュアック、サルイト、プヴンニツック) や、モントリオール地区と飛行機の直行便のある村 (クージュアラピック、クージュアック) から来ている人が多いと言える。ヌナウト (Nunavut, 旧北西準州の中部および東部極北地域) から来たイヌイットの出身地は、地域的にはヌナウトの東部地域にある村が多い。また、ヌナウトの東部地域の病人はモントリオール地区の病院に送られる傾向がある上に、ヌナウトの拠点であるイカルイトとモントリオール地区には直通的航空便が就航しているのでヌナウト東部出身のイヌイットがモントリオール地区に多数来ていると考えられる。

表2 モントリオール居住のイヌイットの出身地

ケベック州内36人	名 称	人 数
(1)	クージュアラープイク (Kuujjuaraapik)	11人
(2)	クージュアック (Kuujuaq)	5人
(3)	クアッタック (Quaqtaq)	5人
(4)	サルイト (Salluit)	3人
(5)	プヴンニツク (Puvirnituq)	3人
(6)	カンギフッスジュアック (Kangiqsujuaq)	2人
(7)	カンギスク (Kangirsuk)	2人
(8)	イヌクジュアック (Inukjuak)	1人
(9)	チサシビ (Chisasibi)	1人
(10)	イヴイヴィク (Ivujivik)	1人
(11)	モントリオール市 (Montreal)	1人
(12)	ケベック市 (Quebec)	1人
ヌナヴト13名		
(13)	イカルイト (Iqaluit)	5人
(14)	ケープ・ドーセット (Cape Dorset)	3人
(15)	レイク・ハーバー (Lake Harbour)	1人
(16)	ブラントン・アイランド (Broughton Island)	1人
(17)	ランキン・インレット (Rankin Inlet)	1人
(18)	イグルーリク (Igloolik)	1人
(19)	ベイ・チャイモ (Bay Chimo)	1人
それ以外の地域 6人		
(20)	グース・ベイ/ハッピー・ヴァレー (Goose Bay/Happy Valley, Labrador)	3人
(21)	セント・ジョンズ (St. John's, Newfoundland)	1人
(22)	フォート・スミス (Fort Smith, NWT)	1人
(23)	クイーン・シャーロット島 (Queen Charlotte Island, BC)	1人



地図1 モントリオール地区在住イスイットの出身地, 1997
(番号と人口規模を示す黒丸は表2に対応している)

II-3. モントリオール地区に来た理由と定着の方法

モントリオール地区に来た理由や定着のやり方は、学生、有職者、無職の3つのカテゴリーに分けて記述、分析した方が理解しやすい。ただし、彼らがモントリオール地区に来た理由は、ひとつとは限らない。モントリオール地区に来る以前にかなりの頻度の移動を経験していることも注意すべきである⁷⁾。

1 学生

インタビューした8人の学生のうち、彼らがモントリオール地区に来た理由は、学校へ行くためが5人ともっとも多かった。残りの3人は入学する以前からモントリオール地区に住んでいた。すなわち、2人の学生はセジェップに入学する以前に、自らの意志ではなく母親についてモントリオール地区に来ていた。1人の学生は、幼児期に北西準州のフォート・スミス (Fort Smith) から、ソーシャル・サービスを通してモントリオール地区在住のユダヤ系男性とフィリピン出身の女性の夫婦の所に養子に出されていた。

後者の3人はセジュップや大学に入学する以前からモントリオール地区に両親とともに住んでいたために、モントリオール地区に住み着くためには、他の人の助けを借りる必要はなかった。極北からきた5人の学生の旅行、住居の選択、生活の金銭的援助やアドバイスについては、モントリオール地区にあるカティヴィク教育委員会の職員が全面的に面倒を見ていた。

2 有職者

調査の時点で、仕事に就いていた者22人のうち12人(54.5%)は仕事に就くことを理由に極北の村を離れ、モントリオール地区にやってきている。残りの10人は他の理由で極北の村を離れ、モントリオール地区に来てから仕事を見つけ、就職した人たちであった。その人たちがもともとモントリオール地区に来た理由は、(1) 学校へ行くため(3人)、(2) 夫やボーイフレンドについてやってきた(2人)、(3) 両親についてやってきた(1人)、(4) 夫の暴力から逃れるため(1人)、(5) 個人的な理由から自由を求めて(1人)、(6) 病院に来る母の付き添いとしてモントリオール地区にやってきたがそのまま残った(1人)、(7) 自身が病院に行くためにモントリオール地区に来たがそのまま残った(1人)などであった。仕事のためにモントリオール地区にやってきたと回答した者の中に、極北では生活費が高い上に仕事がないこと、極北の村での政治に辟易したことなどを移動の理由として補足した者もいた。また、就職する以前に学校に行くためにモントリオール地区に来たと答えた人の中に、出身村における酒や麻薬に絡む社会問題から逃れたかった、と述べた者がいた。

就職のために極北の村から南に来る場合は、受け入れ団体であるマキヴィク、カティヴィク教育委員会、イヌイットの患者の世話をする非営利団体であるバフィン・ハウス、そして北ケベック・モジュールの職員が、住居を見つけたり、転居するのを助けてくれていた。

3 無職の者

インタビューを実施した無職の者25人から得た回答は、(1) 酒、麻薬、暴力、性的な嫌がらせなど社会問題や人間関係に由来する家族問題などから逃げるためにモントリオール地区に来た(6人)、(2) 女性がヨーロッパ系カナダ人のボーイフレンドや夫に同行してモントリオール地区に来た(5人)、(3) 仕事を求めて(3人)、(4) 学校に行くため(2人)、(5) 病院に行くため(2人)、(6) 病院に行く母親の付き添いとして同行し、そのままモントリオール地区に残った(1人)、(7) モントリオール

地区に住む姉の看病のためにやってきてそのまま都市に残った(1人)、(8) モントリオール地区にいる子供に会いに来てそのままモントリオール地区に残った(1人)、(9) 村の生活に疲れてモントリオール地区に来た(1人)、(10) 犯罪を犯し南の監獄へ送られたが、釈放後そのままモントリオール地区に残った(1人)、(11) 特に理由がないという(1人)、そして(12) 妻の出産のために一時的にモントリオール地区に滞在している(1人)であった。

無職の人たちが、住所不定の状態からモントリオール地区に住居を定めるまでのプロセスには大きく分けて2つのタイプがある。第一のタイプは、本人がモントリオール地区に入る以前に、本人の親族や友人がいる場合であり、第二のタイプは、そのような知人が全くいない場合である。

第一のタイプでは、モントリオール地区の新来者はまず、親戚や友人のアパートに転がり込んだり、その間を転々としながら、モントリオール地区の先住民友好センターや女性専用のシェルターであるシェ・ドリなどを窓口(連絡先)として社会福祉金受給の申請手続きをとる。約1ヶ月後には最初の小切手がそこに送られてくる。それをもとにアパートを借りる。翌月からはその新住所に社会福祉の小切手が送られてくる。社会福祉金だけでは生活には十分ではないので、昼食や夕食は各教会やボランティア・グループが運営する無料のレストラン、シェ・ドリ、先住民友好センターが提供する食べ物やフード・バスケットに頼っている。

第二のタイプでは、モントリオール地区に知人が皆無である。ラブラドル出身のある男性は、モントリオール地区につくやいなや、路上を歩いていた人に教会が運営する宿泊可能なシェルターの所在を尋ね、そこにとりあえず落ち着いた。その翌日、彼は先住民友好センターの社会福祉係に面会し、そこを窓口として社会福祉金の受給を申請した。その数日後、シェルターを去りセンターで知り合った中部極北地域出身のイヌイットのアパートに転がり込んだ。彼は、最初の社会福祉の小切手をもらおうと自分自身のアパートを借りた。食事は、第一のタイプの人々と同じく、既存の団体や制度のサービスを利用している。モントリオール地区に住所を定めるまで、イヌイットの女性は先住民女性用のシェルターや世界救世軍の宿泊施設に寝泊まりすることができる。このようにして多くのイヌイットは住所不定の状態から脱出するのである。

4 男女差

今回の調査でインタビューした女性36人、男性19人について、男女間でモントリオール地区に来た理由と定着のやり方に差異があるかどうか見ておきたい。女性がモント

リオール地区に来た理由は、(1) 就職 (8人)、(2) 進学 (8人)、(3) 白人の夫やボーイフレンドに同行 (6人)、(4) 村の中で起こった問題から逃れるため (4人、その内訳は性的嫌がらせ、暴力を夫がふるう、家庭内の人間関係、父の飲酒が各1人)、(5) 両親に同行 (2人)、(6) その他 (6人) (休暇のため、姉の看病のため、ボーイフレンドが呼んでくれた、子供に会いに来た、母の付き添いで、養子に出された) がおもなものであった。一方、男性がモントリオール地区に移住した理由は、(1) 村の中の問題から逃れるため (9人、その内訳は仕事がない3人、村で喧嘩1人、酒で事件を起こし投獄された1人、村の生活に疲れた1人、女性問題3人)、(2) 就職 (4人)、(3) 進学 (2人)、(4) 病院へ行くため (1人)、(5) 妻の出産に同行 (1人)、(6) 特に理由無し (1人) であった。

イヌイットの女性は就職や進学以外に、白人(ヨーロッパ系カナダ人)のパートナーについてモントリオール地区に来た人が多い。その比率は女性の17%あまりになる。これに対して、村の中での問題のためにモントリオール地区に逃げてきた男性が9人、女性が4人いる。その比率は男性全体の47.4%、女性全体の11%であり、男性の約半数が出身村での問題から逃れるためにモントリオール地区へ来ている。

男女の間では、モントリオール地区に定着するやり方に大差はない。しかし、女性の方が男性よりもモントリオール地区に白人のボーイフレンドや夫、仕事の関係者、親戚、知人など受け入れてくれる人が多いという結果が出ている。

II-4. 在住期間

今回のインタビューでは、モントリオール地区に来て1週間しかたっていない者から25年あまりをモントリオール地区で過ごした者まで、かなりの幅がある(表3)。

在住年数を男女別に分類すると、男性は5年以下の在住者が14人(男性全体の73.4%)と多いのに対し、女性は6年以上の在住者が23人(女性全体の63.9%)と多い。さらに、モントリオール地区に16年以上在住している男性は皆無であるのに対し、女性では16年以上20年以下が5人(女性全体の13.9%)、21年以上25年以下が2人(女性全体の5.6%)いる。すなわち、モントリオール地区においては、女性の方が男性よりも在住期間が長いという傾向が見られる。

学生、有職者、無職の者というカテゴリーで、モントリオール地区におけるイヌイットの在住年数を分類した場合、はっきりした傾向は出てこないが、男女別の要因を考慮すると、興味深い差異が存在している。

無職の男性は大多数が5年以下の在住者であるが、無職の女性は1年未満から20年

表3 モントリオールにおける居住年数別人数

	全体	男性	女性
1年未満	9(16.4%)	5(26.3%)	4(11.1%)
1年以上5年以下	18(32.7%)	9(47.4%)	9(25.0%)
6年以上10年以下	13(23.6%)	2(10.5%)	11(30.6%)
11年以上15年以下	8(14.5%)	3(15.8%)	5(13.9%)
16年以上20年以下	5(9.1%)	0(0.0%)	5(13.9%)
21年以上25年以下	2(3.6%)	0(0.0%)	2(5.6%)
計	55	19	36

()内は各列の百分率を示す。

以下までほぼ均等に分布している⁸⁾。有職者の男性は1年以上5年以下の者が、有職の女性は6年以上10年以下の者が多いという傾向が見られる⁹⁾。

学生8人のうち、男性2人と女性6人のモントリオール地区での在住年数は、次の通りである。男子学生は、1年以上5年以下が1人、11年以上15年以下が1人であった。一方、女子学生は、1年未満が2人、1年以上5年以下が2人、6年以上10年以下が1人、21年以上25年以下が1人であった。カティヴィク教育委員会から得た情報によると、ヌナヴィクからセジエップで勉強するために来ている学生の定着率はあまり高くないという。1997年の9月には、26人の男子と44人の女子、合計70人の学生が在籍していた。しかし12月のクリスマス休みが始まる前に男子1人と女子7人がモントリオール地区を去り、出身村に帰ってしまった。翌1998年の4月現在、在籍しているのは、男子18人(約69%)、女子31人(約70%)であった。約30%の学生は飲酒などの問題のために1年を終わらないうちに退学し、モントリオール地区を去っているのである。

Ⅲ. モントリオール地区在住イヌイットの生活の実態

Ⅲ-1. 生活と経済状況

今回のインタビュー調査を実施した55人のイヌイットを収入の点で分類すると、収入が全くなく住所不定状態にある者が3人、社会福祉金に依存している者が22人、学生が8人、非常勤職を含む仕事による収入で生活をしている者が22人であった。

住所不定の者は、友人のアパートや公的なシェルターを渡り歩きながら夜を過ごし

ている。夏には、彼らは路上や公園で寝ることもある。今回の調査によると住所不定のまま終わるイヌイットは少なく、通常、モントリオール地区に到着してから1, 2ヶ月後には先住民友好センターやその他の機関を通して福祉金の受給を申請し、それをもとに住居を定める者が多い。しかし、飲酒などの理由でアパートを追い出される者、賃貸のリースの切れた者、新たに都市にきた者など一時的な住所不定者は常に存在している。

社会福祉金に依存している22人のイヌイットの収入と家賃の状況を見てみよう。福祉金を受給している者の中で最高額収入者は月額にして900ドルであり、最低額収入者は240ドルであった。平均は月額508ドルであったが、もっとも多い受給額は月額490ドルで、22人中8人であった。この金額は、単身者のみならず、母子家庭を含んでいる。彼らが支払っているアパート代の月額は、128ドルから395ドルまで幅があり、単身者なら月額250ドル、子供がいる場合には月額300ドルくらいかかる。また、先住民友好センターなどが斡旋する低家賃住宅であるならば、月額で128ドルから200ドル程度で入居できる。しかしながら彼らの収入から、家賃、電気代、電話の基本料金を支払えば、ほとんどすべての者は手元に現金がなくなる。彼らは、食料に関しては自前で購入するというよりは、慈善事業を行っている諸団体からもらってきたり、そこが提供する食事を食べながら、生き延びている。土曜日、日曜日、クリスマス休みなどには慈善事業所も休みをとるため、この期間には水以外は何も口に入れることができない者もいる。なお、そのような状態でも彼らが食べ物に金をかけるのではなく、アパートを保持するのは、定まった住所を持つことが福祉金を受給するための条件のひとつであるからである。

モントリオール地区で大学やセジェップに通っている北ケベック出身のイヌイットの中で「ジェームズ湾および北ケベック協定」の恩恵を受けている学生と連邦政府から奨学金をもらっているイヌイットの学生は経済面で優遇されている。8人のうち7人は、カティヴィク教育委員会の奨学金を受け、残りの1人はカナダ連邦政府北方省のインディアン局から奨学金を受けている。その8人のうち両親と同居が2人、母親や兄弟と同居が2人、ガールフレンドと同居が1人、子供たちと同居が1人、そして夫と息子と同居が1人、単身で住んでいる者が1人であった。彼らは、住居費や学費、生活費の補助を受けており、一般の学生に比べても金銭的には非常によい条件で在学することができる。事例をひとつあげてみたい。

1966年生まれのある女性には、13歳と6歳になる2人の娘がいる。彼女は、モントリオール地区のマクギル大学に在籍し、社会福祉の勉強をしている。彼女は、カナダ

で新学期が始まる9月から1学年が終わり夏休みが始まる翌年の5月の終わりまで、カティヴィク教育委員会の奨学プログラムから援助を受けている。この期間には、大学の授業料と、アパート代、子供の託児代以外に、生活費として月額1000ドルが彼女に支給される。一方、それ以外の期間、6月から8月末にかけての夏休みにはアルバイトをして生活費を稼がなければならない。彼女によると、子供の養育に金がかかるために、これらのプログラムからの収入だけでは十分ではないと言うが、それでもかなり条件のよい援助を受けていると言えるだろう。

次に、モントリオール地区在住のイヌイットの中で職を持っている人の事例を見てみたい。今回のインタビューでは22人がそれにあたる。彼らの月収はパートの600ドルから6,667ドルとかなりの幅を見せてい

る(表4)。全体の平均は、月収で2,383ドル、年収にして約28,600ドルである。1992年のモントリオール地区在住者全体の平均年収は約3万ドルであり(Colombo 1996: 228)、モントリオール地区に住み、仕事を持っているイヌイットの収入が特に低いわけではないことが分かる。

彼らが住んでいるアパートや一戸建ての家賃は、月額200ドルから950ドルである。200ドルは市営の低家賃住宅であり、950ドルはモントリオール市郊外の一戸建ての家賃である。平均的な場合で、4.5部屋のアパートであると450ドル以上、一戸建てなら700ドル以上かかる。

また、月収が2,500ドル以上ある者や共稼ぎの者の中には、一戸建てを個人所有している人がいる。月収が2,500ドル以上あるイヌイットは、モントリオール地区にお

表4 有職者と無職者の月収入
(カナダ・ドル)

無職者	
\$0	3人
\$1 以上 \$200 以下	0人
\$201 以上 \$300 以下	1人
\$301 以上 \$400 以下	3人
\$401 以上 \$500 以下	11人
\$501 以上 \$600 以下	2人
\$601 以上 \$700 以下	0人
\$701 以上 \$800 以下	1人
\$801 以上 \$900 以下	2人
有職者	
\$500 以上 \$1000 以下	2人
\$1001 以上 \$1500 以下	3人
\$1501 以上 \$2000 以下	3人
\$2001 以上 \$2500 以下	5人
\$2501 以上 \$3000 以下	3人
\$3001 以上 \$3500 以下	4人
\$3501 以上 \$6500 以下	0人
\$6500 以上 \$7000 以下	1人

いて他の住民と同じような生活水準を保っている。

このように、収入に関しては、有職者と学生、無職の者によってかなりの差が見られる。有職者や学生はほとんど衣食住に不自由をしない生活を送っているが、無職の者は既存の制度を利用すればなんとか生きていくことができる状態である。

III-2. 住居と在住地区

カティヴィク教育委員会がドルヴァール市にあった時には、モントリオール市の西側に隣接し、モントリオール地区の空港があるドルヴァール市にイヌイットの人が多く住んでいた。今回の調査の結果では、ドルヴァール市、ラシーヌ市、モントリオール市のダウンタウンの東部に多くのイヌイットが住んでいることが分かったが、イヌイットがコミュニティーを形成しているような集住地区はないことが確認された。さらに無職の者、有職者、学生の間には、住んでいる地域に差異がみられた。

無職で社会福祉金に依存しながら生活をしているイヌイット22人の住所は、モントリオール市のダウンタウン東部に7人、モントリオール市内の南西部に3人、ヴェルダン市に3人、モントリオール市内東端地区に2人、モントリオール市内中東部に1人、モントリオール市内西端地区に1人、ラシーヌ市に1人、モントリオール市内西部に1人、回答無しが3人であった。無職者の大多数の者はモントリオール市内に住む傾向が見られるが、モントリオールの先住民友好センター周辺のダウンタウン東部に7人が在住している点を除けば、彼らは市内に分散して住んでいる。

有職者は、ドルヴァール市に4人、ラシーヌ市に4人、モントリオール島西部に4人、モントリオール市のダウンタウンに3人、モントリオール市の東端地区に3人、モントリオール市内西端地区に1人、モントリオール島の外に1人、モントリオール市内南西部に1人が住んでいる。独身者はダウンタウンやモントリオール市内に、家族と暮らす者はモントリオール市の郊外に住むという傾向が見られる。カティヴィク教育委員会に勤める人はドルヴァール市に、マキヴィクに勤める人はラシーヌ市やモントリオール島西部に住む人が多いという傾向が見られる。

イヌイットの住所の分布状態を概観すると、無職者と有職者の間では、居住地区に差異が見られる。有職者は、モントリオール地区の中流階層が好んで住むモントリオール近郊に住む傾向があり、モントリオール在住のイヌイットの間で階層差が生じていることを示している¹⁰⁾。

学生8人についてみると、ドルヴァール市3人、ラシーヌ市3人、モントリオール島西部地区1人、モントリオール市内西端地区1人であり、モントリオール市のダウ

ンタウンから見て西方の地区に住む人が多い¹¹⁾。

次に彼らが誰と一緒に住んでいるかを見てみたい。社会福祉金に依存しているイヌイット22人のうち、単身で同居者なしが11人、イヌイット以外のボーイフレンドと同居が5人、イヌイットの友人と同居が2人、仏系カナダ人のガールフレンドと同居が1人、子供と同居が1人、兄と同居が1人であった。単身居住者が半数を占めている。イヌイットの無職の男性は、そのほとんどが独身で、単身世帯である。また、ボーイフレンドと同居している女性は、5人すべてがフランス系やイギリス系のカナダ人男性と同居している。

仕事に就いているイヌイットは、家族と同居している者が7人、単身居住者が6人、非イヌイットのボーイフレンドと同居が5人、そして子供と同居が3人であった。独身の若者は単身居住する傾向にあり、それ以外の人は家族かボーイフレンドと同居する傾向にある。社会福祉金に依存している無職のイヌイットと有職のイヌイットを比べると、前者では単身居住者が多いのに対し、後者では家族と同居している人が多いという違いがみられた。

学生は、家族と同居が4人、単身居住者が1人、英系カナダ人のガールフレンドと同居が1人、そして子供と同居が1人であった。調査時点が夏期休暇中で、多数の学生がヌナヴィクの故郷の村に帰っていたために、単身居住者が少なくなっている。現実には、寮生やアパートに住んでいる極北から来た学生は、ほぼすべてが単身居住者である。

Ⅲ-3. 食生活と健康状態

住所不定の人々は、モントリオール市内の教会の提供する食事、世界救世軍が提供する食事、女性用避難シェルターのシェ・ドリ、先住民友好センターが提供する食事を食べ歩いている。調査時点において住所不定であった男性の一人は、月曜日から金曜日までの夕食は世界救世軍で、昼食はある教会が無償で提供する食事をとり、土曜日と日曜日には口に入れる物は水だけのこともあると語った。現金があれば、レストランで食事をすることがある。ちなみにインタビューを行った前日には、彼は朝食をとらず、昼はその教会でスープを、夕食は世界救世軍でラザニアを午後4時頃に食べていた。

無職で社会福祉金を得ている者は、前述のように、酒を飲んだり、家賃を払ってしまえば、ほとんど手元には現金が残らない。基本的に、住所不定の人とそれ以外の無職者との間に食事の内容に大きな違いはない。彼らも、先住民友好センター、シェ・

ドリ、教会や各種の慈善事業団体が提供する食事や食料を積極的に利用しながら生きている。

住所不定者を含めた無職者は、病院に来たイヌイットを宿舎や病院を訪ねて、そこでカリブーの干し肉や干魚などを入手したり、食べることがある。また、頻度は多くないが、極北の村に住む親兄弟や親戚、友人に電話をかけ、冷凍したホッキョクイワナやカリブーの肉を航空便で送ってもらうことがある。女性用のシェルターであるジェ・ドリでは、月に2度ほど水曜日に食材があればイヌイット料理を作り、イヌイットに提供している。機会は少ないが、都市在住の無職のイヌイットもイヌイットの食べ物を食べることができるのである。

有職者は食事を自宅でとることが多い。彼らは、無職や学生のイヌイットに比べ、イヌイットの食べ物を食べる機会に恵まれている。有職者の中には、ほぼ毎日1回はイヌイットの食べ物を食べる人もいれば、月に2回ほどしかイヌイットの食べ物を食べない人まで、さまざまである。多くの有職者は少なくとも週に1度は、イヌイットの食べ物を食べており、個人差があるものの定期的にイヌイットの食べ物を極北の村から入手している。彼らは、極北の村に住む親兄弟、親戚、友人に電話をかけ、肉や魚を送ってもらうこともあれば、親兄弟が自主的に彼らに食べ物を送ってくることもある。彼らは、極北の村から送られてきた肉や魚を冷凍庫や冷蔵庫の冷凍室に入れて保存し、少しずつ食べていた。自宅以外でも、マキヴィクやカティヴィク教育委員会では昼食時に同じ職場のイヌイットが集まり、誰かが極北から持ってきたカリブーの肉やホッキョクイワナをみんなで食べることが月に数回ある。

有職者の食事の事例を2つほど紹介したい。

カティヴィク教育委員会に勤めている25歳の女性は、一人でアパートに住んでいる。食事は自宅かレストランでとっている。彼女はリブステーキが好物で、イヌイットの食べ物がなくても問題はないが、月2回ほど極北の村に住む母親に電話をかけ、航空荷便でイヌイットの食べ物を送ってもらう。1回に7から8キロくらいのカリブーの肉やホッキョクイワナを送ってくれると言う。最近では約1ヶ月前に、ホッキョクイワナ、カリブー、ライチョウを併せて8キロくらいを受け取った。彼女は同僚と病院に通院するためにモントリオール地区へ来ていたイヌイットの老人を自宅の食事に招待したと言う。

もうひとつの事例は、子供がイヌイットの食べ物を食べなくなった事例である。あるイヌイットはモンタニエ（北米先住民のグループ）の女性と結婚し、彼らの間には10歳の娘、7歳の息子、1歳半の娘がいる。彼がイヌイットの食べ物を食べるのは

月2回ほどである。彼は10日前に極北の故郷から「マッタック」(martaq: シロイルカの脂肪がついた皮の部分)、干し魚、アザラシの肉を持って帰ってきた。彼はイヌイットの食べ物も「南」の食べ物も好きであるが、「南」の料理ばかり食べていると胸焼けになってしまうと言う。家庭内では、彼と1歳半の娘はイヌイットの食べ物を食べるが、7歳の息子と妻はそれを食べない。10歳の娘は昔はイヌイットの食べ物を食べていたが、今では食べなくなったと言う。この事例のようにイヌイットの多くは、モンリオール地区に住んでいてもイヌイットの食べ物を好むが、結婚相手がイヌイット以外である場合には、配偶者やその子供たちはイヌイットの食べ物を食べないことが多い。

学生は、「南」の食べ物を好む者が多い。今回の調査に参加した学生は子供の時から「南」の都市で生活してきた者が多かったので、このような傾向が見られたと思われる。

食べ物に関しては、極北の村で生まれ育ったモンリオール地区在住のイヌイットのほぼ全員が、「南」の食べ物よりもイヌイットの食べ物を好む傾向が見られる。有職者はイヌイットの食べ物を定期的に食べているが、無職や住所不定のイヌイットはあまりそれを食べるできない状態にある。

健康状態に関しては、調査対象のイヌイットのほぼ全員が健康に問題はないと回答したが、何人かは次のような病気や怪我に悩まされたと言う。2人の者が過度の飲酒が原因で怪我をしたと言う。さらにボーイフレンドとの不和、離婚や子供との離別が原因で、精神科に通った事例が3件あった。過度の飲酒が原因と考えられる肝臓病が2人、長時間の事務的な仕事に起因する腰痛が1人、都市への環境不適応による腹痛や精神的な抑圧の事例が2人、低血糖症が1人、体の疲れを感じるが2人、ホームシックが2人、高血圧でかつ後頭部に癌のある人が1人いた¹²⁾。これらの病例のうちいくつかは、都市在住と深い関係にあるであろう。

Ⅲ-4. 社会的ネットワーク——都市と故郷——

モンリオール地区在住のイヌイットは、イヌイットのコミュニティーを形成していないことが社会的な特徴である。イヌイットだけを成員とする任意団体もモンリオール地区には存在していない¹³⁾。有職、無職、学生であるにかかわらず、仏系カナダ人、英系カナダ人、ファースト・ネーションズの人(例えば、モーホク、クリー、ミクマクの人)など複数のイヌイット以外の友人を持っている。イヌイット以外の人と出会う場は、職場、先住民友好センター、シェ・ドリ、学校、バー、公園、ショッ

ピング・センターなどである。

有職者は、マキヴィクやカティヴィク教育委員会などの職場で、イヌイット間に同僚としてのネットワークを形成している。さらに、職場外のイヌイットとも個別のつながりがある。ただし、有職者のイヌイットの多くは、都市在住の無職のイヌイットは酒を飲みすぎ問題を起こすことが多いので、つきあいたくないと言う。

学生の友人の大半はイヌイット以外だと言う。極北の村にも多数のイヌイットの友人を持っている場合が多い。

無職のイヌイットは、モンリオール地区に到着した時点では、親戚や同じ村出身のイヌイットとつきあうが、その後、先住民友好センター、シェ・ドリ、バー、公園などで出会って、イヌイットや他の先住民の友人の数が多くなっていく。しかし、モンリオール先住民友好センターにおいては、ここに入居しているイヌイットが他の先住民からは一線を画されていることが、他の先住民によるイヌイットについての会話から伺い知ることができる。彼らはイヌイットのことを「酒ばかり飲んでいる」とか、「金を手に入るとすぐに酒を飲む」などと悪口を言う。一方、出身村において食物分配を実践してきたイヌイットにとって、困っている時に、金や食べ物をくれないファースト・ネーションズの人たちは「けちな人間である」と考えており、彼らに対しよい感情を持っていない。先住民友好センターにおいては、両者の間で表面的な会話や接触はあるが、心から融合したり、先住民であることを基盤として民族の境界をこえた社会的ネットワークを形成してはいない。イヌイットの社会関係は、あくまでエゴを中心とした二者関係の束であって、輪郭のある集団を形成していない。

都市在住のイヌイットの男性は独身である傾向が強いが、イヌイットの女性は非イヌイットの男性と結婚したり、同棲する傾向が見られる。その場合には夫やボーイフレンドの家族や知人との社会的結びつきがつけ加わる。モンリオール地区において夫婦の両方がイヌイットである例は少ない。

都市在住のイヌイットと、彼らの出身地との関係を見れば、学生、有職者、無職者の間に若干の差異が見られるものの、概して彼らは出身地との関係を、電話と訪問によって保ち続けている（表5）。モンリオール地区在住のイヌイット54人のうち75%以上が月1回以上の頻度で故郷（出身村）へ電話をかけている。

学生の大半が、週1回以上電話を出身村の両親や親戚にかけている。有職者も無職者も、月2、3度以上電話を故郷にかける点では、大差がない。無職者でも電話を出身村にかけることができるのは、先住民友好センターの無料電話や、コレクトコールを利用しているからである。無職の者の中には出身村に全く電話をかけない者が20%

表5 故郷（出身村）への電話の頻度

	無職者	有職者	学生	全体
週2回以上	4(16.6%)	5(22.7%)	3(37.5%)	12(22.2%)
週1回	6(25.0%)	4(18.1%)	3(37.5%)	13(24.0%)
月2, 3回	4(16.6%)	4(18.1%)	0(0.0%)	8(14.8%)
月1回	1(4.2%)	7(31.8%)	0(0.0%)	8(14.8%)
時々	4(16.6%)	2(8.7%)	1(12.5%)	7(13.0%)
無し	5(20.8%)	0(0.0%)	1(12.5%)	6(11.1%)
計	24	22	8	54

()内は各列の百分率を示す。

表6 帰省の頻度

	無職者	有職者	学生	全体
行ったり来たり	1(4.2%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(1.9%)
年2回以上	0(0.0%)	11(50.0%)	6(75.0%)	17(31.5%)
年1回	1(4.2%)	5(22.8%)	1(12.5%)	7(13.0%)
不定期	6(25.0%)	5(22.8%)	0(0.0%)	11(20.4%)
なし	16(66.7%)	1(4.5%)	1(12.5%)	18(33.3%)
計	24	22	8	54

()内は各列の百分率を示す。

あまりいるのに対し、有職者の間では皆無だった。

次に都市在住のイヌイットの出身村への帰省（訪問）頻度を見てみたい。帰省の頻度は、有職者・学生と無職者との間では明確な差異が見られる（表6）。

有職者は、半数の人が出身村へ年2回以上帰省している。これはマキヴィクやカティヴィク教育委員会が休暇時に極北の村へ帰省できるような特別補助金を出しているからである。

学生は夏期休暇やクリスマス休みに帰省するために75%以上の人が年2回以上、帰省すると答えている。

無職者は、出身地がヌナヴィクであれヌナウトであれ、モンリオール地区から極北地域への航空運賃が高額であるため、自費で帰省することができない。それでも不定期に25%の人が帰省しているのは、おもに親族の葬式への出席など特別な機会の帰省であった。

無職者は帰省の機会が限られているとはいえ、極北の村から病院や休暇、仕事のために一時的にモントリオール地区を訪れる親戚、友人、知人とはモントリオール地区で接触しており、帰省できないことと故郷との関係が無くなることとは同じことではない。

Ⅲ-5. イヌイット語とエスニック・アイデンティティ

モントリオール地区においては、狩猟や漁労を行うことはできない。さらに独特な服装、食事、宗教などイヌイットが他の民族集団と自らを区別したり、他から区別されたりする民族指標 (ethnic markers) は、ほとんど見られない。例外はイヌイット語を話すことや、極北から送られてきたり、知人が持ってきたイヌイットの食べ物 (アザランやカリブーの冷凍肉や干し肉、ホッキョクイワナなど) をイヌイットの友人と分配することである。また、モントリオール地区に在住しているイヌイットの中には、滑石彫刻や版画などイヌイット芸術を制作している人もいる。しかし、これらの事例を除けば、モントリオール地区の他の住人と同じような衣食住の生活を送っており、イヌイット的な特徴は見られない。彼らは極北の文化を「南」に持ち込み、それを維持するというよりも、「南」の既存の制度や生活様式にしたがって生活をしている。

ここでは、モントリオール地区におけるイヌイットのイヌイット語の使用状況について、エスニック・アイデンティティとの関連からみてみたい。

筆者は55人のイヌイットに英語でインタビュー調査を実施したが、58歳の女性1人を除けば、彼らの英語の会話能力は、日常生活で支障がないくらいのレベルであった。一方、この中でイヌイット語を満足に話すことができないと自ら考えている人が9人いた。それは、ラブラドルや西部極北圏出身の成人イヌイットと、学生 (8人中6人) であった。ラブラドルや西部極北圏の一部の村 (例えばケンブリッジ・ベイ村) では英語が第一言語となっており、そこで生まれ育ったイヌイットはイヌイット語を十分に話すことができない。また、6人の学生は、両親の仕事や家庭の事情で子供時代をモントリオール地区その他の「南」の都市で過ごしてきた人たちであった。彼らは、イヌイット語を十分に話すことができないが、イヌイットであるという意識を持ち続けていた。

モントリオール地区に一時的に滞在している1人のイヌイットを除く54人中、37人 (68.5%) がモントリオール地区において毎日、イヌイット語を話していると回答した。特に、無職の者はほぼ全員が、先住民友好センター、ジェ・ドリ、市内のアットウォーター公園、バー、郊外のドルヴァール・ショッピング・センターなどで、他の

イヌイットにあり、毎日、イヌイット語を話しているとのことであった。一方、有職者は、おもにマキヴィクやカティヴィク教育委員会において同僚のイヌイットと、病院においては患者のイヌイットと、イヌイット語でほぼ毎日、話していた。

問題は、有職者や無職の者の中で、イヌイット以外の人と結婚をしたり、同棲をしながら子供を育てている場合である。母親がイヌイットである場合には、家庭においてイヌイット語を意図的に子供たちに話しかけているが、夫婦の間や、父親と子との間、子供同士の間ではイヌイット語以外の言葉が使用されており、子供たちはイヌイット語を聞いて理解することができても話すことができないという状況にある。特に、家庭においてイヌイット語が使用されなくなりつつある。そのことに関していくつか事例を紹介してみたい。

無職のイヌイット女性の中に、イヌイット以外の男性と結婚していたが、離婚し、シングル・マザーとして子供を育てている人が数人いた。そのうちの1人はフランス系カナダ人とイカルイトで結婚し、彼についてモントリオール地区にきた。4人の子供をもうけたが、11年前にモントリオール地区で離婚した。4人の子供、19歳、15歳と12歳になる3人の息子、13歳の娘は前夫のもとにいる。彼女は週に1回、子供たちに会いに行くことにしている。12歳の息子はフランス語しか話すことができず、顔立ちも白人的でイヌイット意識をほとんど持っていない。その他の子供は、イヌイット語は理解できるが、話すことはできない。彼らの顔立ちは白人的であるが、イヌイットとのハーフであると自らのアイデンティティを表明している。

あるイヌイットの女性は、イヌイット以外の男性と結婚し、5人の子供をもうけた。夫はイヌイット語が分からず、英語が母語である。彼女は、家の中で40%をイヌイット語で、60%を英語で話している。10歳と12歳の娘はトロントで育ったために英語しか話せないが、2、6、5歳の娘はイヌイット語が話せる。この子供たちは、夫と同じエスニック・アイデンティティとイヌイット意識を両方持ち併せているが、後者の方が勝っている。彼女によると、子供たちがイヌイット語を話すことができるかどうかは、周りにイヌイット語を話す人が多数いるかどうかで決まると言う。

別のイヌイットは、モンタニエ・インディアン女性と結婚し、3人の子供をもうけている。彼は職場ではイヌイット語を話すのが、家庭では夫婦間で英語を話している。彼は子供たちにイヌイット語か英語で話しかけるが、子供たちはおもに英語で返事をする。彼の妻は子供たちにフランス語とモンタニエ語で話しかけるが、子供たちはフランス語か英語で返事をする。その家庭では子供同士は英語やフランス語で話している。

イヌイットの夫婦であっても、子供がイヌイット語を話せなくなりつつある事例が存在している。夫婦の間ではイヌイット語で話しているが、家の中では4歳の1人娘と話す場合は、60%が英語、40%がイヌイット語である。子供にはイヌイット語で話しかけても、英語で返事が返ってくる。この夫婦は、娘が「南」の都市に住む限りはイヌイット語を話すことができなくてもよいと考えている。

有職者のシングル・マザーで、2人の子供を育てている事例を紹介したい。彼女の19歳になる長女は子供ができてから独立し、3歳の娘と別の所に住んでいる。長女、3歳のその娘（エゴの孫）、17歳の次女と11歳の三女のイヌイット語を話す能力は次の通りである。長女と次女はイヌイット語を理解できるが、十分には話せない。三女はイヌイット語を十分には理解できず、英語のみを話す。彼女は、孫にはできる限りイヌイット語で話しかけるようにしている。

筆者が調査した限りでは、イヌイット語は都市在住のイヌイットの間では、特別に必要な場合を除いては、彼らの子供たちや子孫の間では使用されなくなりつつある。しかし新たにイヌイット語を第一言語とする人たちが恒常的にモンリオール地区に流入しているので、イヌイット語を話す人口がモンリオール地区から減少することはない。

子供たちがイヌイット語を話せなくなりつつあっても、イヌイットの親たちはイヌイットとしてのアイデンティティを意図的に教え込んでおり、全員ではないにしても多くの子供たちはイヌイットであることを意識している。しかしモンリオール地区のような雑多な民族的背景を持つ人々が住む都市環境では、イヌイットの文化要素やイヌイットという民族的アイデンティティが都市で生まれた世代に継承されることは、きわめて困難と思われる。

Ⅲ-6. 都市における社会問題

都市に住むイヌイットが深くかかわる問題には、失業、住所不定、売春、アルコール中毒、麻薬などがある。ここでは、酒の問題と麻薬の問題を取り上げたい。

カナダでは都市在住のイヌイットは飲酒にふけり、バーに入り浸っているというイメージが定着している。イヌイット自身も、多くの都市在住のイヌイットは酒を飲みすぎ、問題を起きていると思っている。このイメージは間違っていないが、すべてが真実であるわけではない。

55人のうち52人が飲酒について回答してくれた。52人中19人（36.5%）が、飲酒の問題は過去も現在も無いと回答した。23人（44.2%）が、かつては飲酒の問題を抱え

ていたが、現在は問題ない、と回答した。そして10人（19.2%）が、現在飲酒の問題を抱えていると、回答した。飲酒問題を抱えていた、および現に抱えている都市在住のイヌイットは両者を併せると60%以上にのぼる。

次の表7に示すように、有職者、無職者、学生の間で飲酒についてかなりの違いがみられた。

有職者の中で約60%の人がかつては飲酒の問題を抱えていた。彼らは、夫、友人などの手を借りて立ち直った人が多い。妊娠や出産は女性が酒をやめるひとつの契機であった。また、AA (Alcoholics Anonymous) の対話治療、アルコール中毒者のための治療センターに通って禁酒に成功した人が多い¹⁴⁾。かつて飲酒の問題を持っていた人は、再び酒を飲み出すことをおそれ、現在、飲酒の問題を持つイヌイットとつきあうのを極力さける傾向にある。

有職者の中で、かつて飲酒の問題にかかわり、それを克服した人の事例をひとつ紹介しておきたい。現在、25歳になるある女性は、仕事のために6年ほど前にモンリオール地区に移動してきた。彼女はモンリオール地区でレバノン出身の男性と出会い、つきあい始めたがその男性との関係が、うまくいかず、悩み、酒を大量に飲むようになった。このために彼女は仕事に行くことができなくなってしまった。そこで彼女は、仕事場の上司の了解を得て、モンリオール地区の近くのローレンシアンにある治療センターに6週間、毎日通い、心理療法士や精神分析医の助けを借りた。その通院をやめた後も、土曜日や日曜日には夜のAAミーティングに通い、禁酒を続けている。おかげで彼女は仕事場に復帰し、元気に仕事を続けている。

無職者では40%強ものイヌイットが現在でも飲酒の問題を抱えている。さらに、無職のイヌイットの中の40%近い人が、過去に飲酒問題を抱えていた。ただし彼らは友人、ボーイフレンドらの手助けや、AA と治療センターにかよって飲酒問題を克服した。学生は、今回の調査による限り、飲酒の問題にあまりかかわっていない。ただし、

表7 飲酒問題について

	無職者	有職者	学生	全体
飲酒の問題無し	4(17.4%)	8(38.1%)	7(87.5%)	19(36.5%)
かつて問題であった	9(39.1%)	13(61.9%)	1(12.5%)	23(44.2%)
現在問題あり	10(43.5%)	0(0.0%)	0(0.0%)	10(19.2%)
計	23	21	8	52

() 内は各列の百分率を示す。

カティヴィク教育委員会によると、極北の村からセジュップに進学してきた学生の中には、モントリオール地区の生活環境になじまず、酒を飲み、学業を続けることができなくなって極北の村に帰っていく10歳代や20歳代の者が少なくないとのことである。

都市に在住のイヌイットが酒におぼれる原因としては、家族や、配偶者、ボーイフレンド、ガールフレンドとの離別に由来する悲しみ、モントリオール地区という都市における疎外感やホームシック、仕事のないことがおもな理由としてあげられる。

ここで指摘しておかなければならないことは、イヌイットの飲酒の問題は都市に在住するイヌイットにのみ特有に見られる問題ではないと言うことである。現在、飲酒の問題を抱えている人たちは、彼らの出身地である極北の村にもいる。

ラブラドルにかつて住んでいたある男性は、何もすることがないので友人のまねをして、12、3歳の頃から友人とともに酒を飲み、麻薬やシンナー遊びにふけた。学校で休み時間に酒を飲むこともあった。母親以外は誰も助けてくれなかったが、15歳の時から2年間をかけて友人やアルコール・麻薬対策プログラムの助けでそれらの問題を解決した。一方、家では、彼の父親が酒に酔っては、彼をしばしば殴りつけた。彼は、家よりも牢屋にはいっている方が安全であると思い、故意に警察に逮捕されるために他の家に盗みや不法侵入を行った体験を持つ。このように飲酒にかかわる問題は、極北の村々にも存在している。

コカインや大麻のような麻薬にふけるイヌイットもモントリオール地区には少なくない。55人中52人が麻薬についての質問に回答したが、かつて麻薬の問題にかかわっていたという回答者が8人いた。また、現在もかかわっているという者が3人いた。飲酒はカナダ国内では18歳以上であれば合法であるが、麻薬は年齢に関係なく違法である。このため、現在についても過去についても麻薬の問題に対する回答が正確だったとは思えない。

ある男性は、極北の村で9、10歳でシンナーを吸い始め、12、3歳から酒を飲み始めた。極北の村では大麻は1グラムあたり60から70ドルで取り引きされていると言う。極北の大きな村では、10歳代から40歳代までの多数の人が、大麻がなくなるとガソリンやシンナーを吸う。現在はモントリオール地区に住んでいるが、週に1度ほどの頻度で友人から大麻を入手して吸っていると言う。

コカインやヘロインなど危険な麻薬に手を出すイヌイットが極北の村にもモントリオール地区のような都市にもいる。イヌイットがモントリオール地区において麻薬に手を染めるのは、彼らが飲酒をする理由と同じであると考えてよい¹⁵⁾。

Ⅲ-7. 環境認識——都市と極北の村——

都市在住のイヌイット55人に、モンリオール地区と極北の村との違い、モンリオール地区の生活の長所や短所を質問してみた。ここでは、この質問に回答しなかった2人のイヌイットと、一時的にモンリオール地区に滞在していた1人のイヌイットを除いた52人から得た情報を整理し、提示する(表8)。

表8によると、モンリオール地区の生活環境が極北の村々よりもよいと答えたのは全体の50%である。学生と有職者では、モンリオール地区の生活環境についての考えに大きな違いはみられない。有職者と学生はモンリオール地区の方が職、教育、情報など利用しうる資源があり、都市の生活環境を良いと見なす人が多い。しかしながら、同じ人が都市生活を忙しい、流れが早い、ストレスがたまると否定的に考えている。

無職者の中に極北の村々の方がモンリオール地区よりも生活環境はよいと考えている人が31.8%もいる一方で、彼らは極北の村での生活と比べると自由がある、ストレスが少ないと都市での生活を肯定的に捉えている人が少なからずいる。

Ⅲ-8. 将来

妻の出産のためにモンリオール地区に一時的に滞在していた1人を除く、54人に将来はどこに住むのか、極北の村に帰るかどうかを質問してみた。極北へ帰りたい、帰るかもしれないと答えた人は24人、行ったり来たりしたいが2人、「南」に残りたい、残るかもしれないと答えた人が28人であった。現実にはどうなるかは分からないが、意識の上ではほぼ半数強が「南」に残るか、残る可能性が高いと答えている。その内訳は、次の表9に示す通りである。

表8 モントリオールの生活環境

	無職者	有職者	学生	全体
モンリオールの方が良い	9(40.9%)	13(59.1%)	4(50.0%)	26(50.0%)
どちらともいえない	6(27.3%)	8(36.4%)	3(37.5%)	17(32.7%)
極北の村の方がよい	7(31.8%)	1(4.5%)	1(12.5%)	9(17.3%)
計	22	22	8	52

()内は各列の百分率を示す。

表9 将来の落ち着き場所

	無職者	有職者	学生	全体
極北に帰りたい	7(29.2%)	8(36.4%)	4(50.0%)	19(35.2%)
極北に帰るかもしれない	2(8.3%)	2(9.1%)	1(12.5%)	5(9.3%)
行ったり来たりしたい	2(8.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(3.7%)
南に残るかもしれない	1(4.2%)	1(4.5%)	0(0.0%)	2(3.7%)
南に残りたい	12(50.0%)	11(50.0%)	3(37.5%)	26(48.1%)
計	24	22	8	54

() 内は各列の百分率を示す。

この表9を見る限りは、有職者、無職者、学生との間には将来の居住地の希望にあまり大きな差異が見られない。しかし、その理由についてこの3つのカテゴリーの間で明確な差が見られた。

有職者のうち、10人が極北の村に帰りたい、ないしは帰るかもしれないと回答しているが、これはマキヴィクやカティヴィク教育委員会がクーージュアックなど極北へ移転する構想があり、職場の移動に伴う理由で極北へ帰りたいや、帰るかもしれないと答えていた。彼らの多くは住むための家と職があれば、極北に帰りたいと条件を付けている。その2つの条件が満たされなければ、実際には極北に帰らないであろうことが予想される。一方、モンリオールか他の「南」の都市に残りたいと回答した人たちは、極北には良い仕事が無いこと、極北では住宅の入手が困難であること、子供の教育には南の方が良いこと、極北では何もすることが無いこと、極北の生活は抑圧されており、酒を飲めば暴力をふるう村人がいること、極北では生活費が高いこと、などの理由をあげていた。極北の村には、住宅、経済、教育などの問題があることが指摘された。

無職者の中で、極北の村に帰りたい、もしくは帰るかもしれないと答えた人は、仕事があったり、私的なもめ事が解決できれば帰りたいという人たちで、男性に多い。一方、「南」に残りたいという人には、20歳代の女性や犯罪者、精神病患者、同性愛嗜好者で村から追放された男性が多い。また、極北に帰っても職や住宅が不足していると指摘している人も多かった。筆者が調べた限りでは、モンリオール地区の生活がよいから残っているという無職の人はきわめて少数である。

学生の中で、極北に帰りたいと明言する者は、医者、弁護士、精神科医などのスベ

ジャリストになり、人々を助けたいと回答していた。学生の中で「南」に残りたいと回答した者は、モンリオール地区やその他の都市で育った人、長期間の教育を受けた人、家族が「南」に住んでいる人であった。

以上を総合すると、意識のレベルではどのような回答をしたにせよ、かなり多くの者が極北の村に帰らずにモンリオール地区や他の都市に住み続けることが予想される。

Ⅳ. 検 討

ここでは、いくつかの問題のうち (1) 移動, (2) 都市における経済階層と社会的ネットワーク, (3) イヌイット文化とエスニック・アイデンティティ, (4) 都市在住のイヌイットの将来および (5) 都市在住イヌイットの法的認定の困難さの5点について検討を加えてみる。

Ⅳ-1. 移動

モンリオール地区のイヌイットには、5年以上にわたる長期の滞在者が多数いることが分かった。モンリオール地区に移動した理由については、就職、進学などが多かったが、これらの理由以外に彼らに移動を促した構造的な要因が複数、彼らの出身村に存在していることが判明した。極北地域の村では、人間関係の閉鎖性 (スチュアート 1992: 81)、職が絶対的に少ないこと、住宅事情の劣悪さ、酒や麻薬の問題、暴力事件や性犯罪の多発などのマイナス要因が存在している (例えば、Kirmayer *et al.* 1996)。モンリオール地区にある諸要因がイヌイットを引きつけているというよりも、モンリオールに在住しているイヌイットの男性の約半数、女性の約10%は、極北にある問題から逃れるためにモンリオール地区に移住してきていた。

とりわけ無職の都市在住のイヌイットについては貧困、飲酒、麻薬、売春の問題が顕著であるが、彼らが抱える問題はモンリオール地区の問題というよりも、出身村に端を発する問題であると言える¹⁶⁾。極北の村々の生活条件が改善されない限りは極北地域から都市への人口流入はつづき、都市におけるイヌイットの人口は増え続けることが予測される。都市へのイヌイットの移動を理解するためには、極北の出身地域の社会・経済状況を詳しく調査する必要がある。移動と定着に関しては、別稿 (岸上 1999) で論じているので、ここではこれ以上立ち入らないことにする。

IV-2. 経済階層と社会的ネットワーク

カナダ・イヌイット社会全体は、階層化が進んだカナダ全体社会の底辺部を形成しているが、極北のイヌイット社会の中では階層分化はあまり顕著ではない。モントリオール地区のイヌイットの生活状況は、有職者・学生と無職者の間に、大きな違いがみられた。有職者や学生は他のカナダ人と同程度の収入があり、他の都市在住者とほとんど変わらない生活を送っているが、無職の人々は社会福祉制度や慈善事業団体の助けを借りてなんとか生きているというのが実状である。有職者や学生の中には経済的な上昇志向が見られるが、無職者の多くは将来について建設的な展望を持っていない。無職者の多くは学歴、専門知識、技能に欠け、貧困生活を余儀なくされており、彼らがよりよい生活状況へと変わることはほぼ不可能に近い。この現実、都市イヌイットに無力感や欲求不満をつのらせ、彼らが酒や麻薬におぼれたり、生活の必要に迫られて犯罪を犯したり、売春を行わせている。無職者の都市での生活は、カナダの下層階級の生活様式と共通する点が多い。モントリオール地区のイヌイットとの間には極北社会では見られないほどの顕著な階層差が存在している。

モントリオール地区にはイヌイットが集まったり、情報を交換する公的な場所がない。しかもモントリオール地区のイヌイットは任意集団を持たず、分散して住んでいるので、集住地を形成しておらず、彼らの社会的なネットワークは個人が主体的に形成していくほかはない。したがってイヌイット間の相互扶助、イヌイット語の使用は、ほとんど個別的にしか行われていない。すなわち、モントリオール地区ではイヌイットの生活様式、文化要素、あるいはエスニック・アイデンティティを維持する社会的な基盤が弱いのである。

IV-3. 文化とエスニック・アイデンティティ

モントリオール地区においてはイヌイットの民族的な文化要素を維持し実践するには、大きな困難を伴う。あえて彼らの間にイヌイット的な文化的特徴を見つけたとすれば、イヌイット語、食物分配、イヌイット料理であろう。さらにモントリオール地区で生活をする限り、イヌイット的な生活や文化を実践する必然性が存在していない。しかし一方で、1997年の時点では、モントリオールに在住していたイヌイットの大半は、イヌイットとしての帰属意識を強く持ち続けており、行動と意識の間に大きな乖離が見られるのである。

モントリオール地区への新来者の男性はイヌイット語を話し、イヌイット意識を

持っているが、独身のままである傾向が見られ、彼らのイヌイット語やイヌイット意識は次世代に受け継がれることなく彼ら1代限りで消滅してしまうと考えてよい。都市に移動したイヌイットの女性は全般的に、非イヌイットの男性と一時的に同棲したり、結婚する傾向が見られる。彼女たちの子供の世代では、イヌイット語を話すことができなくなる人が出てくる。さらにイヌイット以外のエスニック・アイデンティティを併せ持つ人やイヌイット意識をあまり持たない人が出現する。すでに紹介したように、1991年の先住民人口調査によると、モンリオール地区に在住するイヌイット775人のうち455人は、イヌイットと仏系といった2つ以上のエスニック・アイデンティティを持っているのである。

モンリオール地区のイヌイットは、無職者であれば強いイヌイット意識を持っているが、モンリオール地区で育った学生や、配偶者や片親が非イヌイットである人々は、イヌイットであるという意識よりも、「カナダの先住民」「イヌイットの血を引くカナダ人」、「ケベックの先住民」などエスニック・アイデンティティの範囲を越したより広範なアイデンティティを持つ者が出現しはじめている (cf. ランバート1988)。

IV-4. 都市在住イヌイットの将来

二世代以上にわたる異民族との通婚と都市生活は、モンリオール地区でのイヌイット語の継承を困難にさせ、イヌイットの食物の嗜好を変化させる可能性が高い。モンリオール地区など「南」の都市で生まれ、多様な民族的背景を持つ人々が混住している多文化的な都市環境の中の核家族世帯で育てられれば、両親、友人、自分自身の意図的な努力がない限り、イヌイット語やイヌイット的な生活様式の保持、イヌイットのコミュニティーの形成は、現在も、将来もモンリオール地区においては不可能に近いと言える¹⁷⁾。

では、都市在住イヌイットのエスニック・アイデンティティはどのように変化していくと考えられるか。

カナダにおいては、イヌイットは1982年憲法において先住民であると認定され、その権利が保障されている。さらに都市在住であっても協定の条件を満たすイヌイットやその子孫は、「ヌナウト協定」、「ジェームズ湾および北ケベック協定」から教育費や医療費の補助などの恩恵を受けることができる。このため、都市在住のイヌイットは現実の生活様式とは関係なく、イヌイットであるという社会的な立場を表明し、イヌイットであるという意識を持ち続ける可能性がきわめて高い¹⁸⁾。都市在住のイヌ

イットの子孫たちは、「ジェームズ湾および北ケベック協定」の受益者であり続けることを望む一方で、日常の生活に根ざしたイヌイットの生活様式や考え方が失われるという状況がモンリオール地区において近い将来、出現するのではないかと考えられる。ある条件下ではイヌイットがイヌイットでなくなったり、独自のイヌイット文化を持たないが政治・経済的な利害のためにその民族意識を持つ人々が出現し、人々は無意識のうちに、ある時は意図的にエスニック・アイデンティティを変更したり、複数のアイデンティティを操作的に使い分けることによって都市環境の社会・経済的状况に対処しながら生きていくと考えられる¹⁹⁾。そのような状況のもとでは都市在住のイヌイットの生活を既存の「文化」や「民族」といった概念によって把握することは困難である。都市在住のイヌイットの生活やその多様性を把握するためには、彼らの日常生活における社会的な実践 (practices) や行動戦略を調査しなければならないであろう。

IV-5. 都市在住イヌイットの法的認定の困難さ

イヌイットという民族意識を持ちながら、出身地など極北の村で生活を営んでいるならば、ある人がイヌイットであるかどうかを判別することはそれほど困難なことではない。しかし雑多な民族出身の人々が混住している都市環境の中でイヌイットが生活をし、世代を経て故郷との関係が不明になるにしたがい、そしてコミュニティーを形成していない場合には、イヌイットであると主張する人々をイヌイットと判別し、認定することはほぼ不可能となる。

例えば、「ジェームズ湾および北ケベック協定」のセクション3、「ヌナヴト協定」の第35条には協定の対象となるイヌイットの条件が提示されている。「ジェームズ湾および北ケベック協定」では、イヌイットとは1974年11月15日を基点としてケベック州に住んでいるか、そこで生まれたイヌイット出自の者の中で、コミュニティー(村)がイヌイットとして認定する人、その人の養子、およびそれらの人の養子と血のつながりのある子孫である。また協定の受益者と言う点では、それらの配偶者も含まれるが、イヌイットと認定されるわけではない。「ヌナヴト協定」では、極北の各村に3名から6名の長老から構成されるコミュニティー審査委員会をつくり、イヌイットとしての登録申請者を吟味し、登録者を決定する。登録申請の条件は、存命のカナダ国民であること、自らをイヌイットであると考えていること、イヌイットの文化伝統や社会慣習と関係していること、そしてヌナヴト内の市町村と関係がある者であることである。

このような規定を都市在住のイヌイットに適用しても、彼らや彼らの子孫が異なる民族出身者との婚姻や転居を何世代か続けると、出身地やそこに住む親戚の者と関係が分からなくなり、イヌイットの出自であるとしても、イヌイットであるという法的認知を得ることはほとんど不可能になると予想できる（スチュアート 私信）。

1991年の時点で、イヌイットであるという意識を部分的にせよ持っている人たちの全人口の5分の1は都市に在住している。このことを考慮すれば、明確な法的基準を新たにもうけない限りは、本人がいかにイヌイットであるという主観的帰属意識を持つとも、都市在住のイヌイットの大半が将来的にイヌイットとしてさらには先住民として社会的な認知をされないまま生きていかざるを得なくなるであろう。

V. 結びにかえて

本稿では、モンリオール地区に在住するイヌイットの来住の理由、生活状況などについて報告するとともに、社会的ネットワーク、文化とエスニック・アイデンティティ、都市イヌイットの将来について検討を加えた。ここでは、研究結果を要約しておきたい。

(1) モントリオール地区のイヌイット人口は、20歳代後半から40歳代前半に集中し、55歳を越える人はきわめて少ない。女性の方が男性の方よりも人口数が多い。

(2) 出身地域は、ケベック州内からが65.5%、ヌナヴトからが23.6%、それ以外が11%であった。モンリオール地区在住のイヌイットの大半は、カナダの東部極北圏から来ている。

(3) イヌイットがモンリオール地区に来た理由には、進学、就職、病院へ行くため、ボーイフレンドや配偶者の転居に同行することなどがあげられる。また、極北地域の村々で見られる酒や麻薬の問題、それらに起因する暴力事件や性犯罪の頻発、人間関係の閉鎖性、住宅不足、職不足などの要因のために、極北の村を出て、都市に移り住んできている。後者の場合、モンリオール地区という都市にある生活の資源や都市生活の魅力がイヌイットを引きつけたのではない。

(4) モントリオール地区では、イヌイットの女性の方が男性よりも長期に居住する傾向がある。男性の場合には5年以下の在住者が全体の73.4%を占めるが、女性の場合には6年以上の在住者が全体の63.9%を占めている。また、16年以上の在住者は男性には皆無だが、女性には全体の19.4%もいる。

(5) 生活や収入においては、イヌイットの無職者と有職者・学生の間にかんりの

差異が見られる。有職者や学生は衣食住に不自由をしない生活を送っている。一方、無職者はモンリオール地区にある既存の制度を利用してなんとか生き延びているのが現状である。

(6) 有職者や学生は極北の出身村から送られてくるアザラシの肉、カリブーの肉、ホッキョクイワナを頻度は少ないにせよ食べているが、無職者はそれらをモンリオール地区で食べる機会にはあまり恵まれていない。

(7) イヌイットのみを成員とする任意集団やコミュニティーはモンリオール地区には存在していない。彼らの社会的なネットワークはきわめて個別的で本人を中心としてとりむすばれている。彼らが友人とあう場合は、職場や先住民友好センター、シェ・ドリ、学校、公園、バー、ショッピング・センターである。

(8) 有職者や学生は出身地の親戚や友人を定期的に訪問したり、電話で連絡を取り合っている。無職者はコレクトコールなどを利用して電話連絡を故郷の親戚や友人にとっているが、帰省することは葬式など特別な機会を除けばほとんどない。

(9) モンリオール地区のイヌイットは、イヌイット語の使用や、極北から送られてきたカリブー肉などの食料の分配を除けば、イヌイット的な文化の実践をしてはいない。

(10) 都市のイヌイットの人口は、次から次へと流入する新来者によって維持、増加されているが、異民族婚で生まれた子供やモンリオール地区で育った子供は、イヌイット語を話さず、かつイヌイット以外のエスニック・アイデンティティをイヌイットのものとは併せ持ちつつある。この現象はモンリオール地区という多文化・多民族が混在し、共存している都市において進行しているグローバリゼーションの側面であると考えられる²⁰。

(11) 有職者のイヌイットはモンリオール地区の生活環境がよいと考えているが、都市生活を忙しい、流れが早い、ストレスがたまると否定的に捉える傾向がある。一方、無職のイヌイットはモンリオール地区の生活環境を必ずしもよいとは考えてはいないが、極北の出身村と比べるとより自由があり、ストレスが少ないと肯定的に捉えている人が多い。

(12) 都市のイヌイットの中には酒や麻薬の問題にかかわっている人もいるが、この問題を克服したイヌイットも多数いる。

(13) 極北の村々の社会・経済状況が改善されなければ、都市に残ったり、新たに來住するイヌイットの人口は増加すると予想される。

(14) 都市在住イヌイットの生活を理解し、記述、分析するためには、「文化」や

「民族」といった既存の概念にとらわれることなく、彼らの日常生活における多様な実践を研究の対象にするべきである。

(15) 主観的な帰属意識を除けば、都市在住のイヌイットをイヌイットかどうか判別することはほとんど不可能に近い。都市居住のイヌイットが、先住民としての地位、「ヌナウト協定」や「ジェームズ湾および北ケベック協定」の受益者としての権利を保持し続けるためには、より包括的で明確な判定基準が新たにつくられ、適用されなければならない。

最後に、モンリオール地区での調査の結果に基づいて、今後の研究課題を3つ提起しておきたい。

(1) モンリオール地区では、現状のままではイヌイット・コミュニティは将来も形成されず、都市のイヌイット文化は創成されないと予想される。このことはカナダの都市イヌイットに共通して見られることであろうか。それとも状況次第では、イヌイットのコミュニティや都市文化が新たに生成されるのか。イヌイットのセンターや集合住宅があり、状況の異なるオタワに居住しているイヌイットの事例を調べ、比較する必要がある。

(2) 都市在住イヌイットの出現と増加は、長期的に見れば、都市における民族の消滅や新たな民族の生成過程として捉えることができるのか。ライフヒストリー調査を中心に、2つ以上のエスニック・アイデンティティを併せ持つ人間の出現の過程と彼らの生活の実態を克明に調査すべきである。

(3) イヌイット社会の今後の動向として、都市在住のイヌイットの動静を無視することはできない。世界で同時に進行しつつある政治経済現象に注意を払いつつ時間（歴史）と空間（地域）の脈絡に沿って、「極北」と「都市」に住むイヌイットの生活の実態とアイデンティティを比較しながら、イヌイット社会全体の現状とその変化を研究することが不可欠である。

謝 辞

この論文の基になった情報と資料は、国立民族学博物館の松山利夫教授を研究代表者とする平成8年度および9年度の国際学術研究「現代の諸都市における先住民社会の文化人類学的研究」（課題番号08041038）の一部としてカナダのモンリオール地区において収集されたものである。また、成果の一部は、2度にわたり国立民族学博物館の共同研究会「都市における先住民社会の研究」において報告した。本稿の草稿にたいして松山利夫、スチュアートヘンリ、黒田悦子、清水昭俊、窪田幸子らの諸先生から、忌憚のないご批判、コメントを頂き、草稿を何

度か書き直した。研究代表者の松山利夫先生をはじめとする皆様に感謝の微意を表す次第である。また、現地調査を行うに際して、インタビュー調査に協力して下さった55人の都市在住のイヌイットの皆様と、下記の方々から調査協力を得た。マキヴィクの Carolyn Stone さん、ジェ・ドリの Maria Trudel-Day さん、カティヴィク教育委員会の Denise Allard さんと Anna Giuliani さん、先住民友好センターの David Mohan さん。これらの方々のご協力が無ければ、調査は成功しなかったと考えている。心から感謝する次第である。

注

- 1) カナダの都市在住のファースト・ネーションズやメーティスについては多数の先行研究が存在している。例えば、代表的な研究として Brody (1971), Dosman (1972), Gerber (1977; 1980), Lambert (1988), La Prairie (1994), McCaskill (1981), Nagler (1970), Peters (1984; 1996), Price and McCaskill (1974), Royal Commission on Aboriginal Peoples (1993), Ryan (1979) などがある。

- 2) アラスカのアンカレッジへのイヌビアクやユピックの移動、グリーンランドのヌークへのイヌイットの移動や、彼らの生活については、フォーゲル=チャンス (Fogel-Chance 1993) やスプロット (Sprott 1994)、ハミルトンら (Hamilton and Seyfrit 1993; 1994; Hamilton *et al.* 1996) による研究がある。

アラスカの村、町、都市の先住民人口を調査したハミルトンらは、女性の方が男性よりも都市に移動し、都市とそれ以外の小規模な町村の間では20歳から39歳の年齢グループの男女人口に大きな違いがあることを発見した。そして先住民の移動には、小さな村ほど女性の人口流失が激しく、村の規模の大きさと深い関係があることを指摘している (Hamilton and Seyfrit 1993; 1994)。

フォーゲル=チャンスはアンカレッジに住むイヌビアクの女性について調査し、彼らが欧米型の主流社会の文化に同化されてきたのではなく、イヌビアク文化と現代米国文化との両方の世界に住んでいることを指摘している。彼らは子育て、相互扶助、世帯構成においてイヌビアク的なやり方をアンカレッジにおいても実践していることを例証している (Fogel-Chance 1993)。

さらにアンカレッジに住む先住民を調査したスプロットは、彼らは特定の先住民の伝統や慣習を保持してはいないが、「象徴的な」文化や先住民意識 (特定の先住民集団へ帰属しているという意識) は持ち続けていることを指摘している。一方で、都市在住の先住民女性の非先住民男性との婚姻がこれまでのように高い頻度で行われ、数世代を経た場合には、彼らのエスニック・アイデンティティの変更や消滅につながる可能性を彼女は指摘している (Sprott 1994)。

グリーンランドの人口移動の事例を研究したハミルトンらは、若い女性が村から他出する傾向が強いことや、男女の人口比は村の規模と相関関係があるなど、アラスカの場合と同じような傾向があることを指摘している。しかし、グリーンランドの場合は、行政や仕事場などの地方分散化が政策として実施されており、それらが女性の村から都市への人口流失に歯止めをかける可能性も指摘されている (Hamilton *et al.* 1996)。

- 3) 1996年の6月にはオタワにあるカナダ・イヌイット協会 (Inuit Tapirisat of Canada)、イヌイット女性協会 “Pauktuutit” (Inuit Women’s Association)、イヌイット環極北会議 (Inuit Circumpolar Conference)、オタワのイヌイット・ハウス “Tunggasuvvingat Inuit” などを訪ねて、調査の内容を説明し、協力を依頼するとともに、都市在住のイヌイットについての情報を収集した。同年の7月にはモンリオール地区にある、北ケベックのイヌイットの政治・経済団体であるマキヴィク (Makivik)、都市先住民一般に対してサービスを提供するモンリオール先住民友好センター (Native Friendship Centre of Montreal)、女性用「駆け込み寺」であるジェ・ドリ (Chez Doris)、北ケベックの学校教育を管理・統括するカティヴィク教育委員会 (Kativik School Board) の事務所を訪れ、調査内容の説明を行い、協力と調査許可を求めた。モンリオールの諸機関から調査についての協力を得た後、同年の7

月末にモントリオール先住民友好センターにて質問票を用いた予備調査を10人のイヌイットについて実施した。そして帰国後、予備調査の結果を公表するとともに（岸上 1997）、本調査のために質問票を改良した。そして筆者は本調査を1997年6月17日から8月8日まで、モントリオール地区で実施した。

- 4) 1997年の6月25日から7月2日までシュ・ドリにて7人の女性にインタビューした。7月3日から7月11日までマキヴィクにて14人にインタビューした。この中には、夏期休暇中にアルバイトをしている学生が7人含まれている。7月15日から17日までカティヴィク教育委員会で働いている11人のイヌイットの職員にインタビューした。そして7月21日から8月5日までモントリオール先住民友好センターでイヌイット23人にインタビューした。この23人の中にはイヌイットの学生が1人含まれている。
- 5) 調査の時期が夏期休暇中であり、多数の学生がヌナヴィク（ケベック州極北部）の出身地に帰省していたために、モントリオール地区でアルバイト中の学生にしかインタビューを行うことができなかった。さらにモントリオール地区に在住しているイヌイットの小中学生らについては間接的な情報しか入手できなかった。このため、子供と学生のカテゴリーについては統計学的な意味での代表性に偏りがある。
- 6) 今回の調査では、全体のほぼ3分の2のイヌイットがケベック州内からモントリオール地区へ来たことになる。モントリオール地区の先住民友好センターの先住民雇用サービスに登録している67人のイヌイットの出身地を地域別にみると、ケベック州内から39人（58%）、ヌナウトから25人（37.3%）、その他の地域が3人（4.4%）であった（岸上 1997: 67-68）。
- 7) 都市在住のイヌイットの移動パターンの研究は未開拓の分野であり、今後の研究課題としたい。また、モントリオール地区から他の都市や極北の村へ移動したイヌイットの追跡調査も今後の重要な研究課題である。
- 8) 無職の者25人のうち、男性12人と女性13人の内訳は次の通りである。男性12人のうち、モントリオール地区在住が1年未満が5人、1年以上5年以下が5人、6年以上10年以下が1人、11年以上15年以下が1人であった。女性13人のうち、モントリオール地区在住が1年未満が1人、1年以上5年以下が5人、6年以上10年以下が2人、11年以上15年以下が2人、15年以上20年以下が2人、21年以上25年以下が1人であった。
- 9) 有職者22人のうち、男性は5人、女性は17人であった。男性の場合、モントリオール地区の在住が1年以上5年以下が3人、6年以上10年以下が1人、11年以上15年以下が1人であった。一方、女性の場合、モントリオール地区の在住が1年以上5年以下は4人、6年以上10年以下が7人、11年以上15年以内が3人、16年以上20年以下が2人、20年以上25年以下が1人であった。
- 10) この傾向が、モントリオール地区の都市在住のイヌイットの特徴であるのか、それともモントリオール地区の都市在住者一般の傾向であるのかを確定するためには、比較研究を試みる必要がある。イヌイットという民族という要因よりも、ジェンダーや階級という要因によって同じイヌイットであっても在住地域が異なっている可能性が高い。
- 11) 1998年の調査で College Marie-Victorin に通っているイヌイットの学生約20人はそのセジュップの近くにあるアパートのビル数件に隣接して住んでいることが判明した。これは1種の集住地といえるかもしれない。
- 12) 本人は回答しなかったが、インタビューした者の中にエイズ患者（女性）が1人いることが分かっている。毎夜、ダウンタウンのバーに酒を飲みに出かけるイヌイットの女性は、エイズ感染についてはハイ・リスク集団であると考えられている。
- 13) カナダの首都オタワにはイヌイットだけを対象とする“Tungasuvingat Inuit”という名称のイヌイット・センター（Webster 1993: 70-76）とヴァニニエ地区にはイヌイット住宅が存在している（Carpenter 1993: 62-69）。オタワには、これら2つの場所を拠点として、イヌイットのコミュニティーが存在していると言える。
- 14) AA とは、飲酒の問題を持つ者が民族、人種の違いに関係なく集まり、体験を話したり、集団で禁酒を実践する有志のグループで、モントリオール地区には複数存在している。一方、治療センターは、アルコール中毒者を治療し、人々が日常生活に復帰できるように訓練する場所である。モントリオール近郊のオカ・リザーブには先住民のためのセンターがあり、イヌイットの中にもそこに通った者がいる。
- 15) モントリオール総合病院（Montreal General Hospital）のギル博士は、精神科医のカーマイヤー博士らとともに、モントリオール地区に住む先住民の間での酒や麻薬の乱用の問題に

- について調査プロジェクトを計画し、実施している (Gill n.d.)。
- 16) グリーンランドの事例 (Hamilton *et al.* 1996) が示唆しているように、極北の村々での学校教育や職業訓練、経済構造、社会問題の状況が改善されれば、都市へ移動するイヌイットの絶対数は減少するのではないかと思う。その減少分だけ、都市で問題に直面するイヌイットが少なくなるのではないかと考える。
 - 17) 「伝統文化」を僻地のアボリジナル社会から学び、自らの文化をつくり、保持しようとしてとめているシドニーに住むオーストラリア先住民の事例 (鈴木 1995; 1997) と比べた場合、モントリオールのイヌイットは「伝統文化」にあまり執着せず、イヌイットの都市文化の(再)創造をしていないという点で、好対照をなす。シドニーやアデレードのオーストラリア先住民 (松山 1993; 鈴木 1995; 1997) とカナダの都市先住民の生活状況についての比較研究は興味深い課題である。
 - 18) スチュアートは、「イヌイット」であるか否かの規定は最終的には法律によって規定する以外に「客観的な」定義は存在しないと主張している (私信)。
 - 19) 筆者は「生存の行動と便宜性」の概念 (松田 1995: 202; 1997: 220) が都市在住イヌイットの行動を説明する上で有効であると考えている。
 - 20) ひとつの地域内で複数の文化が混在している状況では複数のエスニック・アイデンティティを併せ持つマルチ・エスニックな人が出現することが、カリブ海域やアフリカの諸社会では以前から知られている (例えば, Drummond 1980)。

文 献

- Brody, H.
1971 *Indians on skid row: the role of alcohol and community in the adaptive process of Indian urban migrants*. Ottawa: Northern Science Research Group, Dept. of Indian Affairs and Northern Development.
- Carpenter, M.
1993 Urban Inuit. *Inuktitut* 76, 62-69.
- Center for International Statistics at the Canadian Council on Social Development
1996 *Demographic profile of aboriginal peoples in major Canadian metropolitan centres*. Prepared for the National Association of Friendship Centres.
- Colombo, J. R.
1996 *The Canadian global almanac*. Toronto: Macmillan Canada.
- Dosman, E. J.
1972 *Indians: the urban dilemma*. Toronto: McClelland and Stewart Limited.
- Drummond, L.
1980 The cultural continuum: a theory of intersystems. *Man* (N. S.) 15, 352-374.
- Fogel-Chance, N.
1993 Living in both worlds: "modernity" and "tradition" among North Slope Inupiaq women in Anchorage. *Arctic anthropology* 30 (1), 94-108.
- Frideres, J. S.
1998 *Aboriginal peoples in Canada: contemporary conflicts*. (fifth edition) Scarborough, Ontario: Prentice Hall Allyn and Bacon Canada.
- Gerber, L.
1977 Community characteristics and out-migration from Indian communities. Paper presented at Department of Indian Affairs and Northern Development, Ottawa, November 9, 1977.
1980 The development of Canadian Indian communities. *The Canadian review of sociology and anthropology* 16 (4), 126-134.
- Gill, K.
n.d. Progress report: substance abuse among urban native peoples. Addiction unit, Montreal General Hospital. Unpublished Manuscript.
- Hamilton, L. and C. L. Seyfrit

- 1993 Town-village contrasts in Alaskan youth aspirations. *Arctic* 46 (3), 255-263.
- 1994 Coming out of the country: community size and gender balance among Alaskan natives. *Arctic anthropology* 31 (1), 16-25.
- Hamilton, L. *et al.*
- 1996 Outmigration and gender balance in Greenland. *Arctic anthropology* 33 (1), 89-97.
- Honigmann, J. J. and I. Honigmann
- 1970 *Arctic townsmen: ethnic backgrounds and modernization*. Ottawa: Canadian Research Centre for Anthropology, Saint Paul University.
- Kirmayer, L. J. *et al.*
- 1996 Suicide attempts among Inuit youth. *Acta psychiatrica Scandinavica* 94, 8-17.
- 岸上伸啓
- 1996a 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」 スチュアートヘンリ編『採集狩猟民の現在』 pp. 13-52, 東京: 言叢社。
- 1996b 「カナダ・イヌイットの社会・経済変化」 『国立民族学博物館研究報告』 21 (4), 715-775。
- 1997 「カナダの都市先住民について——モントリオールのイヌイットを中心に」 『カナダ研究年報』 17, 66-72。
- 1998 「世界システムの中のイヌイット」 煎本孝編『周極地域諸文化の比較研究』 pp. 38-48, 札幌: 北海道大学文学部。
- 1999 「イヌイットはなぜ都市をめざすのか」 青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市』 pp. 193-209, 東京: 青木書店。
- Lambert, C. (カーメン・ランバート)
- 1988 「カナダ都市部における原住民のエスニシティ」 益子待也訳, 綾部恒雄編『カナダ民族文化の研究』 pp. 137-169, 東京: 刀水社。
- La Prairie, C.
- 1994 *Seen but not heard: native people in the inner city*. Ottawa: Department of Justice, Canada.
- Lefebvre, D.
- 1996 *Jobs in Nunavik*. Kuujuaq, P. Q.: Kativik Regional Government.
- Makivik
- 1997 *Nunavik at a glance 1997*. Lachine, P. Q.: Makivik Corporation.
- 松田素二
- 1995 「人類学における個人, 自己, 人生」 米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』 pp. 186-204, 京都: 世界思想社。
- 1997 「実践的文化相対主義考」 『民族学研究』 62 (2), 205-226。
- 松山利夫
- 1993 「オーストラリア連邦と先住民アボリジニ」 『国立民族学博物館研究報告』 18 (3), 409-451。
- 1997 「共同研究会メモ——都市における先住民社会の研究」 『民博通信』 75, 97-103。
- McCaskill, D. N.
- 1981 The urbanization of Indians in Winnipeg, Toronto, Edmonton and Vancouver. *Culture* 1 (1), 82-89.
- Nagler, M.
- 1970 *Indians in the city*. Ottawa: Canadian Research Centre for Anthropology, Saint Paul University.
- Peters, E. J.
- 1984 *Native households in Winnipeg: strangers of coresidence and financial support*. Winnipeg: Institute of Urban Studies.
- 1996 Aboriginal people in urban areas. In D. A. Long and O. P. Dickason (eds) *Visions of the heart*, pp. 305-333. Toronto: Harcourt Brace & Company.
- Price, J. A. and D. N. McCaskill
- 1974 The urban integration of Canadian Indians. *Western Canadian journal of anthropology* 4 (2), 29-45.

Royal Commission on Aboriginal Peoples

1993 *Aboriginal peoples in urban centres*. Ottawa: Canada Communication Group.

Ryan, J.

1979 *Wall of words: the betrayal of the urban Indian*. Toronto: P. Martin Associations.

Sprott, J. E.

1994 "Symbolic ethnicity" and Alaska natives of mixed ancestry living in Anchorage. *Human organization* 53 (4), 311-322.

スチュアート, ヘンリ

1992 「定住と生業」北海道立北方民族博物館編『第6回北方民族文化シンポジウム報告—定住と移動』pp. 75-85, 網走: 財団法人北方文化振興協会。

鈴木清史

1995 『都市のアボリジニ』東京: 明石書店。

1997 「文化を創造する人々」西川長夫他編『多文化主義・多言語主義の現在』pp. 200-211, 京都: 人文書院。

Webster, D.

1993 "A place where Inuit are welcome". *Inuktitut* 76, 70-76.